

周恩来なき中国と今後の日本

(上)

東京外大助教授 中嶋嶺雄

中国情勢の展開が、あまりに急激なため、ここに掲げたい一も若干、古くさくなったらしいがある。
一月八日に周恩来首相が死去して以後、走資派批判がわきあがった。二月、三月と激動が続き、四月四日の清明節から翌五日にかけて、まさか天安門事件が起こるとは、スターリン体制崩壊の過程で、抑圧されていた東欧諸国の民衆が一挙に不満を爆発させたにすぎないことを示す事件だ。走資派批判の背景をみるに、制が一応、健在でありながら、中国のようにならぬ、意味をもつ。一口でいえば、毛沢東体制下では深刻な何を考えたのだろうか。このまま推移すれば、毛主席が天寿を全うしたとき、用辞を統むのも、鄧小平ではないか、と思ひ描いたに違いない。さらに鄧副首相の用辞が非常に特色あるものだった。

民衆の不満が噴出

“激動”を示す天安門事件



講演する中嶋氏

んと位づけて詳しく眺みあげたが、解放後のふたりになる抽象的になり、文革段階ではまったくといいほど、抽象的な表現が並べられている。これを防止すべきだと言いつつ、中国近代の社会主義運動に突きつけるため、遺志を継いで奮闘しよう、と結んで氏に抵抗する人がいたはずだ。その結果、序列からみても下の「人民中国誌」は周恩来追悼号だが、表紙にはなにもなくヘーシをくじなれば周首相追悼号であることがわからない。
「学習と批判」誌は文革派の機関誌とみなされるが、表紙にみるに、二月四日号をみると、折衷主義批判の論文が目立つ。折衷主義といえは、周首相の歩みか思い出しているが、二月

だ。かつてスターリン体制直後、すべて毛主席の指示で動いた。天安門事件は、これと性格を副首相である。この意味は大ききを見逃すわけにはいかない。この席で用辞を統むのが鄧小平の意図は、毛沢東の遺志を継いで奮闘しよう、と結んで氏に抵抗する人がいたはずだ。その結果、序列からみても下の「人民中国誌」は周恩来追悼号だが、表紙にはなにもなくヘーシをくじなれば周首相追悼号であることがわからない。
「学習と批判」誌は文革派の機関誌とみなされるが、表紙にみるに、二月四日号をみると、折衷主義批判の論文が目立つ。折衷主義といえは、周首相の歩みか思い出しているが、二月
位置にあった華国録氏が首相代行という変則的な形で任命された。その後、走資派批判が吹き荒れた。昨年十一月ごろから始まった天安門前場にある民衆運動が、毛主席の遺志を継いで奮闘しよう、と結んで氏に抵抗する人がいたはずだ。その結果、序列からみても下の「人民中国誌」は周恩来追悼号だが、表紙にはなにもなくヘーシをくじなれば周首相追悼号であることがわからない。
「学習と批判」誌は文革派の機関誌とみなされるが、表紙にみるに、二月四日号をみると、折衷主義批判の論文が目立つ。折衷主義といえは、周首相の歩みか思い出しているが、二月
革命前の周恩来首相の事跡、功績は中国革命史の中に、きちんとしておくべきだ。周首相の真後から、文壇、紙、共産党の理論誌「紅

周恩来なき中国と今後の日本

〈中〉

東京外大助教授 中嶋嶺雄

現代の中国では共産党の二元化指導のもと、毛思想純化の建前をとっている。そのなかで周恩来哀悼の勢力があること自体、深刻な問題だ。これは一方

つ、という立場から政治を、私物化している。こんな不安や危惧(きん)の念を抱いていたのではなからうか。その背後に

重なる真が公開されている。毛沢東と江青の関係は当時、党内でも問題になり、周恩来や康生らが仲に入り、最終的には二人の関係を認めることになった。このとき江青夫人は「将来、どんなことがあっても政治に口をはさまない」との一札を入れたという。これも「延安日記」に

でもなく、すべて毛主席の側近だった人たちが、人間的、感情的(えんじ)恨みによって政治が動かされる場合、ある日突然、数万の人が集まることはない。数万人の人は、いくつものスローガンを用意していた。すでに名

チラつく江青批判

天安門事件は痛烈な皮肉

まで「東方紅」なき、毛沢東主席をたたえる歌ばかりを歌っていた民衆が、周恩来を悼む形で「インター」を大合唱した意味は、決して小さくない。天安門事件では毛沢東批判がほのめ

チラつくのが毛沢東夫人の江青である。天安門事件は、まず走資派批判の背景として周恩来

澤(らんびん)の出現で妻の座を追われる結果となった。麗麗かという、天安門事件を振り返るとき、どうしても避けて通れないから、天安門事件で、大衆が賀子貞の名前を出さず、楊開慧を前面に押し出した

社会主義体制下で、このよう押しで批判されていた鄧小平と走資派に、あたかも味方するごとく大衆が裏切った事実を直視すべきだろう。

周恩来首相は国家的使命感に燃え、粉骨砕身、中国のために尽くした、という見方が圧倒的だった。これに対し、現在の政治をみると、文革派の人たちが毛思想の「解釈権」を

江青夫人に対する批判が出はじめたことだ。中国人民がはつきりし、楊開慧をのぞくローカ

日(ひ)の江青夫人は大変な美人で、最近、ソ連で刊行され、話題に

かかっていたことだ。楊開慧の名を出すことによつて、毛沢東の在り方と、江青に批判を投げかけたことは無視できない。



鄧小平追放処分を支持して、8日朝、北京天安門前広場で行われた支持デモ

